

## Stage9

### The Thing in the Cupboard

物置の中の物体

作・クリス・ポーリング

絵・ジョン・スチュアート

<読むまえに>

お子さんが読むまえに、この本についてお子さんと話すといいでしょう。

・表紙と裏表紙を見ましょう。この本にどんなことが書かれているかヒントが見つかります。

・「落とし物」という言葉について話してください。どういう意味でしょう？ これまでに、何かをなくしたり、見つけたりしたことがあるか、お子さんに聞いてみてください。

・残りのページをパラパラとめくって絵を見ましょう。このお話ではタイガーにどんなことが起こると思うか、お子さんにたずねてみましょう。

自分のスピードでこの本を読めばいいよと、お子さんにいってあげましょう。

<ひっかかることば>

ここにあげるのは、お子さんがこの本を読むときにひっかかりそうなことばです。

cupboard 戸棚

property 所有物

invisible 目に見えない

spider クモ

X-bot Xロボット

alert 警告

penalty ペナルティ

goalie ゴールキーパー

[p. 1]

物置の中の物体

作・クリス・ポーリング

絵・ジョン・スチュアート

[p. 2]

1章——落とし物

タイガーは不機嫌でした。

「ぼくはボールをけったんじゃない」タイガーは文句を言いました。「落っことしただけだ」

「3回も？」キャットが笑いました。「ジョーンズ先生がボールを取り上げたのも無理ないわ」

[p. 3]

「ぼくはサッカーチームのキャプテンなんだ。つまり、練習しなくちゃならないんだ」

「まあ、ボールを取り戻したかったら、ジョーンズ先生の前でいい子にする練習をすることだ」

ね」とマックスが言いました。

<物置>

[p. 4]

タイガーはジョーンズ先生が物置のドアを開けて、ボールをしまうのを見ていました。先生はドアを閉めました。タイガーはいっそう不機嫌になりました。

[p. 5]

2章——クモ

ジョーンズ先生は指を口にあてました。

「シーッ！」先生は言いました。「今日のお芝居の授業では、みんなにクモになってもらいます」

タイガーはとてもおとなしくすわっていました。顔はサッカーグラウンドに引かれた白線のように白くなっていました。彼はクモが大の苦手だったのです。

[p. 6]

ジョーンズ先生はクモのまねをしてホールをはいまわりました。「みんな、この講堂のすみずみまで、目に見えないクモの巣を張りめぐらせてください」

「目に見えないクモの巣だってさ！」タイガーがバカにしました。タイガーはクモのかわりに、自分を見えなくすることにしました。

[p. 7]

タイガーは講堂の奥にはっていきました。そして、腕時計のダイヤルを回して……

[p. 8]

「タイガーはどこに行った？」少ししてからマックスが小声で言いました。

「どこにいるかわかるような気がするわ」キャットがため息をつきました。「見て！」

キャットは腕時計を指さしました。小さな赤い点が、その上で点滅していました。それは、タイガーが小さくなったことを示していました。点は時計の文字盤のうえを動き回っていました。

「ああ、なんてこった！」とマックスがうめきました。

[p. 9]

3章——その物体……

物置のなかは暗くて、じめじめしていました。タイガーは腕時計のボタンを押してライトをつけ、最大限の明るさでぐるっと振ってあたりを照らしました。

<落とし物>

<バットとボール>

[p. 10]

タイガーのプラスチックのボールは落とし物の箱の中にありました。タイガーはニヤッと笑うと、それをとりに登りました。タイガーは、箱のふちにからだを引っ張り上げました。

[p. 11]

突然、腕時計が光りはじめました。

「X ロボット警報？」タイガーは腕時計に映し出された文字を読んで言いました。「どういうことだ？」

背後で、音がしました。小さな足がパタパタといっているような音でした…… 小さなクモの足のような音です。ゆっくりと、タイガーは振り返りました。そのとき、彼はその物体を目にしたのです。

[p. 12]

<うわー！>

<ビーッ！>

[p. 13]

一方……

「みんな、よくできました！」とジョーンズ先生が言いました。「こんなすばらしいクモは見たことがないわ。こんなにすばらしいクモの巣もね！ さあ、そのままできるだけ、じっとしてちょうだい。いい、みんなはいまハエを捕まえようとしているところよ！」

「どちらかという、タイガーを捕まえたいな」とマックスはつぶやきました。

「物置の中なのよ」とキャットが小声で言いました。

「行こう」とマックスが言いました。「ジョーンズ先生にタイガーがいなくなったことを気づかれる前に、あいつを連れ戻そう！」

ふたりは物置のほうへゆっくりと忍び寄っていきました。

[p. 14]

4 章——物置の中

その物体は、ビーッという音を立てて、前進してきました。タイガーは悲鳴をあげて、後ずさりしました。落とし物の箱がシーソーのように揺れだしました。その物体がタイガーにせまってきました。

「助けて！ 助けてくれ！」とタイガーは叫びました。「あ、あ、あれが……」

タイガーはその物体が何なのかわかりませんでした、まさにクモのようでした。

[p. 15]

タイガーは箱から飛び降りました。なわとびのロープを 1 本つかむと、それにつかまって物置をぶらさがって横切りました。箱が棚から落ちてその物体を宙に放りだしました。

[p. 16-17]

箱とその物体はサッカーボールのつまんだ網に落ちこみました。網が口を開いて、ボールがで

たらめなペナルティーキックみたいに、そこらじゅうを跳ねました。  
「こんなにいっぱいサッカーの練習は必要ないよ！」タイガーはわめきました。  
運よく、タイガーは自分のボールが転がってくるのを見つけました。すぐさま、タイガーはボールの穴にゴールキーパーのように身を投げて、なかに隠れました。

[p. 18]

その物体はタイガーのそばを転がっていきました。ビービーと音をだしつづけています。まるで、その物体もタイガーとおなじくらいこわがっているようでした。タイガーはびっくりしてその物体を見つめました。

<ビー！>

<ビー！>

[p. 19]

5章——すばらしいお芝居

お芝居の授業がこれほど静かだったことはこれまでありませんでした。みんなは物置を見ていました。

「ハエの音じゃないみたいだよ、先生」だれかが息をのみながら言いました。「ゾウの群れみたいだ！」

「ぼくにはタイガーみたいに聞こえるんだけどな！」マックスがそつと言いました。

[p. 20]

ジョーンズ先生は物置のところへ歩いて行って、ドアをさっと開けました。これは大きなまちがいでした。なかからガラガラと音をたててあらゆるものが転げ出てきて、床の上にぶちまけられました。

「心配いりませんよ、先生！」マックスはすかさず言いました。「キャットとぼくが片づけを手伝いますから」

[p. 21]

キャットがプラスチックのボールの中にいたタイガーを拾いあげたことに、だれも気づきませんでした。キャットはいそいで、人目につかない講堂の反対側へ行きました。タイガーがボールの中からはいできて、一瞬後には、元の大きさに戻りました。

[p. 22]

あと片づけの最中に、ジョーンズ先生は何かを踏んづけました。「あら、やだ」先生は声をあげました。「落とし物の箱の中にあつたおもちゃを壊しちゃったみたいだわ」先生はそれを差しました。

それはその物体でした。完全にぺちゃんこになってしまったみたいでした。もうビーツという音もたてていませんでした。

[p. 23]

「ジョーンズ先生」マックスが言いました。「ぼくに直させてもらえませんか？ 友だちのアントに手伝ってもらいますから」

「ありがとう、マックス」ジョーンズ先生は言って、ペちゃんこになったその物体をマックスに渡しました。それから、先生はぐるりと見まわしました。

「タイガーを見て、みんな！」先生は叫びました。「まだクモみたいにからだをすぼめてるわ。これこそが、先生が言っているすばらしいお芝居よ！」

[p. 24]

<もっと読みたい人は……>

その物体に何が起こるか知りたくありませんか？ そういう人には、Message in an X-bot をおすすめします。

<読んだあとで>

読んだあとで、この本についてお子さんと話しましょう。こんな質問をしてみましょう：

- ・このお話の最初で、タイガーが不機嫌だったのは、なぜだろう？
- ・ジョーンズ先生はお芝居の授業で何を教えていた？
- ・タイガーが物置に入って、どんなことが起こったかな？
- ・その物体は何だと思う？
- ・この本を読んで、どのように感じた？

このお話をまた読んでみるよう、お子さんにすすめましょう。読む自信をそだて、つかえずに読めるようになります。

<ほかにすること>

お子さんに、その物体の絵を描いてもらってははどうでしょう？ あるいは、この次に何が起こると思うか、オリジナルのお話を考えてもらうのもいいかもしれません。実際に何が起こるかは、Message in an X-bot で読むことができます。